

令和4年度 兵庫県立湊川高等学校 学校評価

評価基準 5…とてもよくできた 4…よくできた 3…できた 2…あまりできなかった 1…できなかった		
教育方針	(1)綱領「誠実・協同・自由・自治」の精神を踏まえ、勤労を尊び、学ぶ意欲を育み、自己教育力の育成に努める。 (2)生徒一人一人の個性を尊重し、きめ細かな教育的支援によって自他を大切にすることしなやかにたくましく生きる力を育む。	
教育目標	1 人間として不可欠な倫理観の育成と人権尊重の精神に基づく教育の充実を図る。 2 自ら学ぶ意欲を育て、基礎的・基本的な学力の定着を図る。 3 定時制高校としての特色を生かし、魅力ある地域に開かれた学校づくりを進める。	

番号	分掌等	本年度の重点目標	具体的な取り組み	評価	総括(成果及び課題と改善方策)	学校関係者評価
1	総務部	防災避難訓練、震災講話等により、生徒・教員共に防災意識を高める	防災避難訓練を実施し、避難経路を確認させる。また、阪神・淡路大震災の教訓伝承のため震災講話を行い防災意識を高める。緊急管理マニュアルを見直し、実用性を高める。	4.2	成果本年度は水災害避難訓練を行った。生徒の振り返り学習から、地震火災の避難との違いを効果的に、生徒に理解させることができたと思われる。課題:今後より、避難訓練を充実させるために、「教員のみ」「実施時間不明」等の訓練方法をどのように組み入れていくかを検討していく。	・地域内でゴミの投棄が問題になっており、湊川高校生に、クリーン作戦(地域清掃)をしてもらいたい。
2		ホームページの更新、学校案内の配布や学校紹介チラシ(みなふく通信等)配布を行い、広報・宣伝活動に努める	ホームページ(動画配信も含む)、オープンハイスクールや見学時に魅力・特徴を発信できるようにする。学校紹介をより魅力あるものに改善する。	4.6	成果本年度は公式ホームページ・ツイッターの更新頻度を上げ、閲覧回数・フォロー数共に、高くなり、オープンハイ感想でも情報発信に高い評価があった。学校紹介チラシも中学校用に加え企業用を作成し求人開拓に役立てることができた。	・コロナ禍において実施できていなかった地域活動を来年度は実施する予定である。新湊川七夕灯籠流しをはじめ、様々な地域の行事に参加し、またボランティア活動等にも積極的に行ってもらいたい。
3	教務部	基礎・基本の定着への取組	少人数指導、習熟度別授業等を活用し、個に応じた学習指導を行う。また、教師間の連携協力を密にするなど指導体制を確立する。	4.1	少人数クラスや習熟度クラスを活用し、生徒一人一人に対してきめ細やかな学習指導ができた。今年度、低学力の生徒に対する指導は教科の枠を超えることができなかったため、来年度は成績会議等で教師間の情報共有を行い、職員全体で学習指導に生かす。	・コロナが収まりつつあり、学校行事も積極的に行われているのがホームページを見て分かりました。生徒たちが頑張っている姿を住民の方々にも見てもらいたい。
4		教科研修会の充実	教材、指導方法、評価についての共通理解を深める。また、観点別学習状況の評価について、より一層理解を深め、実践する。	3.9	今年度から始まった観点別評価については、教務の研修会を通して理解を深め、学校全体で実施することができた。1学年においては、今年度より改訂した教務規定に基づき評価を行ったが、10段階評価においては想定より低い評価となってしまった。来年度に向けて、教務規定の一部を見直し、より本校生徒の実態に合った評価を行う。	・コロナが収まりつつあり、学校行事も積極的に行われているのがホームページを見て分かりました。生徒たちが頑張っている姿を住民の方々にも見てもらいたい。
5	生徒指導部	社会的規範意識と正しい判断力を持ち、自主的・自律的に行動できる生徒の育成に努める	授業を含む、様々な学校行事や体験活動を通じて他者への思いやりや助け合いの精神を学ぶ。	3.3	今年度は昨年度に比べ、コロナ以前に近い形で学校行事を実施することができた。様々な行事や活動を通じ、協調性や助け合いの精神を学べたことが成果である。課題としては行事等を計画するうえで、教員間での打ち合わせや意見集約を早めに行い、反映できればよかったと思	・地域活動が再開されることで、生徒たちが地域に貢献することで、褒めてもらう機会が増えるといい。
6		1人1人の生徒を大切に、個々の生徒の状況に応じた効果的な指導を行う。	生徒との対話等を通じ、生徒理解に基づく指導を行う。誰もが安心・安全に学べる学校にするため、情報共有を密に行い、全教員で足並みを揃えた効果的な指導を行う。	3.2	生徒の情報共有については生徒情報交換会や学年会等を通じて、綿密に行った。結果として教員が個々ではなく複数で協力して指導を行うことができた。課題としては生徒指導の場面で全教員が統一した意識を持って指導にあたることができなかった。	・自己肯定感を高め、自己理解を深める取組を各学年・生徒指導部を中心に実施しているので、今後は、生徒の何を育てたいかを明確にし、生徒たちがさらに自信を持ち、前向きに生活を送れるように、各部署が連携し合い、学校全体で様々な取組を行ってほしい。
7	進路指導部	キャリア教育の一環としての進路指導を行う	総合的な学習の時間、総合的な探求の時間や進路HRIにおいて、「進路の手引き」や「高校生キャリアノート」を活用し、自己の将来について深く考える機会を設ける。	3.6	生徒たちが、自分たちの将来・進路について考える機会を増やすため、来年はノートや手引きの活用だけでなく、外部講師によるキャリア意識についての講演会なども行いたい。	・学校全体、そして学年を通してどんな湊川高校生を育てるかを考えて見てほしい。
8		在校生の進路意識を啓発する	自己の進路適性を把握し、進路意識の向上を促すために、2年生を対象に「分野別ガイダンス」を実施し、進学や就職など自己の進路適性について考える機会を設ける。	3.9	今年度は特に総合的な探究の時間の内容を変更し、学年毎に内容を変える試みを行った。全学年が同じ内容を聞く進路講演会等よりも、それぞれの学年で必要な話を聞いた方が、生徒の集中もより高まるようだった。	・自己肯定感を高め、自己理解を深める取組を各学年・生徒指導部を中心に実施しているので、今後は、生徒の何を育てたいかを明確にし、生徒たちがさらに自信を持ち、前向きに生活を送れるように、各部署が連携し合い、学校全体で様々な取組を行ってほしい。
9	保健部	健康診断受診率70%、検尿提出率80%を目指し、生徒の健康意識・自己管理能力の向上を目指す	健康診断前にはSHRなどを利用し、健康診断の意義について保健教育を行う。	3.7	検診受診率は、70%を超えたが、検尿提出率は58%に留まった。4回の提出日を設けているが、回を逃すごとに提出者は減少している。生徒の意識改革しか改善方法はないが、どうやって意識改革させるかが課題である。そこで来年度は、養護教諭が各教室を回り、検尿に関する保健教育を行う取り組みを試行する予定である。	・自己肯定感を高め、自己理解を深める取組を各学年・生徒指導部を中心に実施しているので、今後は、生徒の何を育てたいかを明確にし、生徒たちがさらに自信を持ち、前向きに生活を送れるように、各部署が連携し合い、学校全体で様々な取組を行ってほしい。
10		保健講話等により、自分を取り巻く健康情報リテラシーの向上を図る	LGBTQ及び薬物乱用防止に関する講話を実施し、生徒感想文をほけんだよりに掲載するなど、他者の意見を共有する。	4.1	今年度は、生徒互助会の健康講話予算がついたため、左記2件の講話に加え、体験型講話として、ボクシングとヨガの講話を行うことができた。生徒の反応もよく、意義のある講話となった。次年度も、同様に講話を実施したいが、予算面の問題が大きな課題である。	・PBIS(Positive Behavioral Interventions and Support)【ポジティブな行動介入と支援の意味】を積極的に行う。生徒の肯定的な行動を支援していくために、学校全体で取り組むこともあるが、ちょっと問題を抱えている生徒に対する個別的な取り組みも考えられる。その際、例えば、ある生徒が今はできていなくてこれからできたらいと思われる目標を決め、教員全員でその目標を共有し、目標の行動を生徒ができていたら、その行動をほめる。また新たな目標を設定してきたらほめる、ということを繰り返すことによって、生徒の問題行動も改善されていく。
11	1年	生徒一人一人が自身を認められるように支援する	・「褒める」ことを通じて自己肯定感を育む。 ・自分と異なる他者を認め、思いやりのある行動力を育む。	3.8	普段の前向きな言葉かけだけでなく、担任を中心として「MVPファイル」や「三行日記」を通じて文字で一年間生徒に自信を与えられるような言葉かけができたことはよかった。今後もこの取り組みを継続し、多くの先生方の協力を得ながら、生徒の自己肯定感の向上を図りたい。	・PBIS(Positive Behavioral Interventions and Support)【ポジティブな行動介入と支援の意味】を積極的に行う。生徒の肯定的な行動を支援していくために、学校全体で取り組むこともあるが、ちょっと問題を抱えている生徒に対する個別的な取り組みも考えられる。その際、例えば、ある生徒が今はできていなくてこれからできたらいと思われる目標を決め、教員全員でその目標を共有し、目標の行動を生徒ができていたら、その行動をほめる。また新たな目標を設定してきたらほめる、ということを繰り返すことによって、生徒の問題行動も改善されていく。
12		互いを尊重し、前向きに学校生活を送れるよう支援する	・規則正しい生活リズムの大切さを自覚させ、授業等に前向きに参加させる。 ・家庭との連携を大切に、生徒の成長するサインを見逃さず、情報共有を行う。	3.6	概ね授業に前向きな生徒が多かったが、私生活の乱れや気の緩みから欠席遅刻がかさんだり、失速する生徒も多く見受けられた。保護者に連絡し、生徒の情報を共有する機会も多かった。引き続きこまめな生徒への言葉かけを大切に、家庭との連携を図りたい。	・地域の行事に参加することで、生徒の活躍の場も増え、ほめられる体験が増えることによって、生徒たちの自信につながっていく。
13	2年	互いに学び合う関係を通して、他者を思いやり、尊重する態度を育てるとともに、自尊感情を高める	・LHRや総合探究などの時間を活用し、他者理解や自己肯定感を高めるプログラムを実施する。	3.4	コーピングの取り組みやLHRでの「役割交換手紙」を行い自己肯定感の向上に努めた。人権HRでは合同でHRを行い生徒の感想文をフィードバックし、他者の考えを知ると共に自己の理解に努めた。自己理解等に関するLHRは、計画的に実施できなかったためコーピングとの調整を図り、計画的・継続的に実施したい。	・このころのふれあい育児体験をはじめ異学年・異校種の交流をすることで、立場が違ってもほめられる機会が増え生徒の自信につながる。今後はたくさんの生徒が参加すると思う。
14		規範意識を高め、社会性の向上を図り、進路意識の向上を図る	・学校生活全般におけるルール・マナー遵守の意識を高め、自らの行動に自覚と責任を持つ態度を育成する。 ・早い時期から卒業後の進路を意識させ、自らの可能性を広げる取り組みを行う。	3.0	イエローカードを受ける生徒が多く出た。同じ生徒が複数回指導されることが多く、学年全体の規範意識の向上と個々の生徒に対する指導が課題である。進路HRや講演会等を通して進路意識の向上を図ることに努めたが、生徒の意識の差が大きく、進路に向けての雰囲気づくりや情報提供等、学年全体での進路意識の向上を図る取り組みを充実させていきたい。	・このころのふれあい育児体験をはじめ異学年・異校種の交流をすることで、立場が違ってもほめられる機会が増え生徒の自信につながる。今後はたくさんの生徒が参加すると思う。
15	3年	自己理解・他者理解を深め、互いを思いやり支え合うことができる集団になる	学校行事やLHR・総合学習などを通して、自他を大切にすることを養い支え合うことのできる集団を目指す。個々の長所を活かし、さらに伸ばせる指導を心掛ける。特に目立たない生徒への声掛けをこまめに行うことで全ての生徒が学びやすい体制を作る。保護者との連絡を密に行い、生徒の環境を把握する。	3.3	総合的な探求の時間での「自分らしさとは」などの授業や進路決定を通して、自己理解が深まった。学校生活、学校行事(特に修学旅行)では、他者を思いやりたり、互いを支え合う姿も見ることができた。	・このころのふれあい育児体験をはじめ異学年・異校種の交流をすることで、立場が違ってもほめられる機会が増え生徒の自信につながる。今後はたくさんの生徒が参加すると思う。
16		自分とじっくり向き合い、進路を実現させる	進路指導部と協力・連携し、自己の適性を知り、進路を実現させる。	3.5	進路指導部と十分に連携を取り、進路実現をさせることができた。	・このころのふれあい育児体験をはじめ異学年・異校種の交流をすることで、立場が違ってもほめられる機会が増え生徒の自信につながる。今後はたくさんの生徒が参加すると思う。
17	4年	相互理解を深め、互いを尊重して思いを伝え合い、支え合う集団作りをサポートする	LHRや学校行事を通して自己の内面に向き合うとともに、互いに思いを伝え合い、異なる立場や意見への配慮の重要性を認識して、互いを尊重する関係をつくる。	3.8	ネットトラブルについて話し合いながら学ぶ人権HRや、文化祭などの学校行事に向けてのクラスでの協同作業を通して、自らの強みを理解するとともに互いを尊重しながら協力し合う関係を築くことができた。	・このころのふれあい育児体験をはじめ異学年・異校種の交流をすることで、立場が違ってもほめられる機会が増え生徒の自信につながる。今後はたくさんの生徒が参加すると思う。
18		自らの将来を想像し、進路希望の実現を目指して自主的に行動する態度を養う	一人一人の進路希望をしっかりと聞き取り、卒業後の目標を具体化させるとともに、それぞれの思いに寄り添いながら、必要な手段を提示して実現につなげる。	3.6	個々の生徒の特性に応じた進路実現に向けて、自らじっくりと考えて進路を決定できた生徒もいるが、なかなか安定した将来像を考えられない生徒もいた。さらなる関係機関との連携強化が必要である。	・このころのふれあい育児体験をはじめ異学年・異校種の交流をすることで、立場が違ってもほめられる機会が増え生徒の自信につながる。今後はたくさんの生徒が参加すると思う。
19	人権教育推進委員会	人権教育推進体制への取り組み	人権教育推進委員会を中心に、講演会・映画会等を実施し、自分の大切さとともに他者の大切さを認めることができる人権感覚を育成する。	3.8	保健部と連携して、講演会を実施することができた。映画会でも講演会に関連したLGBTQと障がい問題を扱った内容を実施し、映画の後、人権教育推進教員が部落問題を中心とした人権課題について、講話を行うことができた。	・このころのふれあい育児体験をはじめ異学年・異校種の交流をすることで、立場が違ってもほめられる機会が増え生徒の自信につながる。今後はたくさんの生徒が参加すると思う。
20	特別支援教育推進委員会	校内支援体制の充実と通級による指導	医療的サポート推進委員会を運営し、合理的配慮をすすめる。特別な支援を必要とする生徒に対して通級による指導を実施する。	4.1	【医療的サポート委員会】計画通り医療的サポート推進委員会を開催することができ、十分な合理的配慮をおこなうことができた。また、4年間安心安全に学校生活を送ることができたのも、医療的サポート推進委員会が機能したからだと言える。 【通級】通級指導が始まり3年が経過した。今年度の通級受講者は4人(LD2名、ADHD1名、診断無し1名)となり、その中の1名が卒業を迎えた。身体感覚を養うためのコーディネーショントレーニング、板書の書き取りや査考をタブレットで代替することなどに取り組むことができた。課題は、「自分の困り感にどうやって気づかせるか」「職員全体での支援や長期・短期目標の共有」「課題はあるが通級を受講しない生徒への手立て」である。	・このころのふれあい育児体験をはじめ異学年・異校種の交流をすることで、立場が違ってもほめられる機会が増え生徒の自信につながる。今後はたくさんの生徒が参加すると思う。